

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2022 年度)

提出日 2023 年 3 月 19 日

報告者 塚 原 修 一

課題研究テーマ	コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～
代表者 (所属)	塚原修一 (関西国際大学)
メンバー (所属)	サブテーマ 1: 塚原修一 (関西国際大学)、濱名篤 (関西国際大学)、山田礼子 (同志社大学)、川嶋太津夫 (大阪大学)、森利枝 (大学改革支援・学位授与機構)、白川優治 (千葉大学)、深澤晶久 (実践女子大学) サブテーマ 2: 千葉美保子 (甲南大学)、村上正行 (大阪大学)、岩崎千晶 (関西大学)、川面きよ (成城大学)、浦田悠 (大阪大学)、遠海友紀 (東北学院大学)、嶋田みのり (東北学院大学)、多田泰紘 (京都橘大学)、石井和也 (宇都宮大学)
担当理事	白川優治
コメンテーター (所属)	溝上慎一 (桐蔭横浜大学)
実施した活動	<p>新型コロナウイルス感染症により、オンラインによる非対面授業が大学に余儀なく広まっている。こうした状況における大学教育の可能性をさぐるために、本課題研究では学生の学習を支援する学習環境デザインと学修成果の評価を取り上げた。2つの異なる接近法を並列させて、サブテーマ 1「非対面大学教育における学修成果の評価」と、サブテーマ 2「ニューノーマル時代における学習環境デザインモデルの構築」の研究をすすめる、教育実践研究の専門家をコメンテーターに迎えて両サブテーマの連携と統合の推進をはかった。</p> <p>サブテーマ 1 では、教育課程の一部ないし全部を非対面で実施して卒業率が高い教育課程として、国内外から、社会人を主な対象とする専門・職業教育課程に注目した。2021 年度は米国の事例として成果基盤型教育 (Competency-Based Education, CBE) を取り上げた。2022 年度は国内事例に注目した。日本では 2001 年に大学通信教育設置基準が改正され、メディアを利用した授業のみで卒業に必要な単位が取得できるようになった。これにより発足した教育課程を含めて、社会人学生が多いものから「成果」にあげた事例を抽出し、ラウンドテーブルでは 2 事例を、課題研究シンポジウムⅢでは分野別の差異に注目して経営領域の 3 事例と非経営領域の 2 事例を取り上げた。</p> <p>サブテーマ 2 では、学習環境・学習支援の現状把握を目的とし、2022 年度は国内の多様な属性・規模の大学を対象にインタビュー調査を実施した。さらに、教室などのフォーマルな学習環境を対象とした学習スペース評価システム (LSRS) の評価対象を、インフォーマルな学習環境にも広げるべく、拡張版 LSRS の開発に着手した。2023 年 3 月時点で計 6 大学にインタビュー調査を実施した結果を活かし、拡張版 LSRS の開発を</p>

	<p>進めている。その成果の一部として、ラウンドテーブルではインタビュー調査の進捗報告および拡張版 LSRS の開発に向けて、ワークショップ形式で学習環境について参加者とともに議論を行った。課題研究シンポジウムⅢでは、インタビュー調査のうち 2 事例を取り上げ、分析結果を報告するとともに、拡張版 LSRS を用いた中規模私立大学 1 事例の評価と分析の結果を報告した。</p> <p>2021 年度の課題研究シンポジウムⅢでは、サブテーマ相互の連携と統合のさらなる推進をコメンテーターから求められ、この年度の「残された課題」として 2022 年度に代表者が検討をすすめた。その結果、課題研究の枠組みの整理と結論部分とにより対応することとし、今年度のシンポジウムⅢにおいて結果を発表したところ、コメンテーターの了承が得られた。すなわち本課題研究を構成する 2 つのサブテーマを、大学教育の一般教育と専門教育をそれぞれ主に分担するものと位置づけた。また本年度の成果の一部として、両サブテーマを通して、教育課程の質保証と卒業率の維持向上にかかわる事項を基盤的要素、教育課程、学習支援に整理し、2020 年以降のコロナ禍への緊急対応にあてはめ、大学教育の今後の可能性について考察した。</p>
<p>成 果</p>	<p>第 44 回大会ラウンドテーブル 13 「非対面大学教育の学修成果評価の事例」(2022 年 6 月 4 日)。サブテーマ 1 の成果の一部を報告した。</p> <p>塚原修一「非対面大学教育の学修成果評価の事例」 中嶋康二「熊本大学大学院教授システム学専攻での経験」 篠田雅人「社会構想大学院大学実務家教員養成課程における学びの双方向性」</p> <p>学会誌 44 巻 2 号にその報告として、塚原修一ほか「非対面大学教育の学修成果評価の事例」を掲載した。</p> <p>同ラウンドテーブル 14 「ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える」(2022 年 6 月 4 日)。サブテーマ 2 の成果の一部を報告した。</p> <p>石井和也「インタビュー調査の概要と論点整理」 浦田悠「学習スペースの評価システム (LSRS) の紹介」 多田泰紘「コロナ禍においてスタートした学習環境・学習支援の事例」</p> <p>学会誌 44 巻 2 号にその報告として、千葉美保子ほか「ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える」を掲載した。</p> <p>2022 年度課題研究シンポジウムⅢ「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～」(2022 年 11 月 26 日)。司会：山田礼子、報告：塚原修一、濱名篤、村上正行、浦田悠、多田泰紘、コメンテーター：溝上慎一。学会誌 45 巻 1 号に以下を掲載予定。</p> <p>山田礼子「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～：研究の趣旨，目的，指定討論と討議について」 塚原修一「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～：非経営領域のオンライン教育課程」</p>

	<p>濱名篤「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～：社会人大学院ビジネススクール等を参考にした教育方法と教育評価」</p> <p>村上正行「学習環境・学習支援に求められる要因と評価に関する検討—大学の学習環境・学習支援に関するインタビュー調査」</p> <p>浦田悠「学習スペースの評価システム（LSRS）拡張版の開発」</p> <p>多田泰紘「学習環境を評価するシステムの実践—大学ラーニングコモンズでの学びに着目して」</p> <p>山田礼子「2022年課題研究シンポジウムⅢのコメント，応答，討議」</p>
<p>残された課題</p>	<p>サブテーマの連携と統合については、結論部分の対応についてさらに検討をすすめる。サブテーマ1については、2023年度の課題である国内の量的調査をすすめる。サブテーマ2については、最終目標のひとつであるハンドブックの開発を進める。ハンドブックの開発に向けて、インタビュー結果の分析を進めつつ、拡張版LSRSの完成を目指す。</p>